

2023年7月の総評に代えて

○林 桂○

●桜望子●(山形県 29歳)

感情を空瓶に入れて流す
梔子の花は
少しでも触れたら
茶色く濁る

【評】短歌体でも俳句体でもない、短詩の文体で書く作者。少数派かもしれない。1行目と2～4行目との距離感が美しい。梔子の花の傷みややすさを知る作だ。

●大橋 弘典●(群馬県 21歳)

午後の
往診
向日葵迷路に
園児が消える

【評】昭和30年代か40年代の趣き。小説の一場面のようでもある。謎の正体は「往診」にあるだろう。

● 茶和鈴 ● (東京都 55歳)

海沿いの花時計

2時間待ったことを思い出す
麦わら帽子だけでよかった夏

【評】回想が美しくなる年代があるだろうか。まだ何も持たず、時間がたっぷりあった十代が美しさとして甦る。

● 松下 誠一 ● (東京都 20歳)

にんじんの

ナムルが冷蔵庫にあると
言ってふたたび母は眠った

【評】夜遅く帰ってきた息子に、起きてきた母は、夜食のことだけ言ってまた眠りにつく。日常のごくありふれた場面のようにだが、母とはどういうものかが的確に描かれている。

● ビスコ ● (愛知県 49歳)

よく眠る術後の父上夏の雨

【評】大きな手術を受けた後の父親の様子。普段使わない「父上」の言葉に思いは

籠もる。抑制的な「夏の雨」の取り合わせも効果的。

● 青野陽 ●（熊本県 20歳）

深くなる夜 掠れていく希望
アプリコットのジャムの
瓶を洗おう

【評】希望は深夜にしぼんでゆくものかもしれない。2行目3行目は、その救いではないけれど、しばし忘れさせてくれる慰めにはなっているだろう。

● 杵いう子 ●（佐賀県 39歳）

半夏生まばたきだって水の音

【評】「まばたきだって水の音」がいい。あるいは涙を示唆しているのかもしれない。「半夏生」には、植物と、七二節気（夏至の11日目）の二つがある。この作品は孰れがよいか。

● マズルカ ●（山口県 21歳）

美しい骨を遺して死にたくて

花の香りのミルクを選ぶ

【評】もちろん「美しい骨」（遺骨）と「花の香りのミルク」は、現実では繋がらない。繋がるのは抒情詩の世界の中である。ここでのみ繋がるという感覚が、この世界を美しいものとして感得させる。

● 香取小春 ●（宮崎県 30歳）

大丈夫って何度も言う
大丈夫じゃなくなる

【評】たしかに。一度「大丈夫」と答えるときは、本当に大丈夫だろう。それを何度か繰り返す答えは、不安の表現になる。内心の不安と闘っての言葉だ。

● 四ツ目 ●（北海道 21歳）

イヤホン無しの帰り道は
現実を聞いて帰るしか無いのよね

【評】イヤホンは現実を聞かないための装置なのである。忘れれば現実の中を帰るしかない。

● 貴田 雄介 ● (熊本県 36 歳)

パパが良いと泣きわめいてそんな
日も園に預けるしかなくて泣く

【評】園は保育所(園)。子育ての現実の中で、働くパパは心痛めつつ奮戦せざるを得ない。日本の子育ての場は苛烈だ。

● うたた ● (岡山県 17 歳)

ここだけに影がぽつんと炎天下

【評】もちろん、「ぽつん」の影の持ち主は「作者」だろう。あるいは「作者」の分身たる何者かだろう。

● 高野 琢磨 ● (東京都 18 歳)

各駅で帰る愛

【評】遠距離とまでは行かない恋愛の帰途。あるいは、自由になるお金のない十代の恋。しかし、「各駅で帰る」が切ないとは思っていないだろう。

● 上村りん ● (奈良県 21 歳)

歳を取ったネコを撫でて
ひさしぶりの鯨の南蛮漬けを待つ

【評】久しぶりの帰省だろう。愛猫は老いている。好物の母の手料理を待つ。帰省の感慨がうまく表現されている。特別ではないこんな場面こそ感じられるものだ。

●かわなご まい●（埼玉県 21歳）

さらら さっ さくら
ぽ・ぽぽっ たんっぽぽ
バランッ。バララン。バラ

【評】言葉遊びだが、作者の感性のよさが感じられる。